

之介外四名の銘があり今から約二百年前のものである。八幡宮における宮祭りの番帳さんが現在残っている。元禄時代の古い紙片に書かれたものであるが、その番帳さんに紺屋や油屋等の家業名が記されている。これらによって当時の集落の状況も想像されるのである。しかも農家は米の利息金でお祭りをやったが、漸次に農家が減少したために、宮祭りもできなくなった―等の記録も残っている。

この境内には天照皇太神宮の大石―元禄七年甲戌二月十一日建立をはじめ、明治・大正・時代に奉納された盥漱・狛犬や、また昭和十三年奉獻の燈籠等が数多く並べられて、村落民の信仰心の厚さが証明され嬉しい限りである。明治・大正・昭和と戦前までは東与賀村における三大村社の一つとして地域住民の崇敬が広がったのもここに大きく起因するものである。

## お蔵

この「お蔵」は穀倉のことで、昔上納米を貯蔵したりここから船で運んだ所であるが、船津の「お蔵」は龍造寺隆信公の頃、鷹や鴨狩りの跡とも言われている。現在の古川国武宅の西側がその地所であるらしい。即ち米・麦をはじめ肥料や粉炭等を積んだ船舶や木材をいかだにして、この「お蔵」近くまで運んで来ていた。そのためこの船津は昔より家業の職種が非常に多かつた。まず、人が集まると酒類であるが、酒屋は故大石平次（酒倉が四棟並ぶ）、炭問屋は吉原、旅館（昔の木賃宿）の力武、その他銭湯・紺屋や精米業の秀島、医院の久納等、往時より各種各様の職業が賑やかに活気づいていた。言わば東与賀村では一番の開拓村であり進歩的文化村であった。即ち精米業も東与賀では最も早く発動機利用の先端を行き、各家庭の電燈も福岡県大川市より川副町犬井道

へ―それが漸次西部方面に波及して、広江そしてこの船津へと点燈されたのである。電気の世の中となつて最初に恩恵を受けたのが船津であり、一番遅く灯つたのは大野村であるが、それは大正五年の頃であった。まさにこの船津は、天恵の八田江によって生まれ発展した郷土東与賀の発祥の地ともいうべきであろう。

## 五上町

上町については貞享四年（一六八七年）の郷村一覧に、実久村の中に「上町」の字名が出ている。したがって今から約三百年前には既に村落としての形態ができていたのである。昔は小高い島であつて、その周囲や真ん中辺りに縦堀や横堀が幾筋も流れていた。今日なお「島の内」とか「島の中」―等の地名が残っているのはその事を証明している。やはり人間の生活上この堀が必要で、この邑の住宅のほとんどが堀岸にあつたり堀を裏側に持っている。そしてこの村にも「郷倉」の跡（副島達美宅の北側）があつたが完全に堀に囲まれて、出入口はただ一つに限られていたという。

現在の世帯数は僅かに二〇戸で本町内で最も少ない小邑であるが、昔からの地域としては現在の船津南や今町付近にまで広がりがあつたという。この小邑に古刹の妙福寺と若宮さんを祀つた宇堂がある。妙福寺は本願寺派の浄土真宗で寛永十五年の創建、開基は高木宗運であり現在の本堂は昭和五年六月に改築されてある。若宮社は外観上神社らしい宇堂ではないが、社殿内に入ると三尊の御神体が祀られてある。中央に薬玉を持つ若宮さんの

御神体があり、その両側に剣を持ち厳しい形相の男神の二体が守護し奉っている。  
社殿中央の天井に墨筆で、左記のことが記録されている。

天明六年丙午歳二月吉良日

謹奉修造与賀庄上町村若宮大明神宮殿一字信心檀越武運亨通福寿増益 大匠貞富団十清次

天下泰平圓土安全万民快樂 施主当邑氏子中

この社殿も長い年月を経たために腐朽し雨漏りもひどくなったので、昭和三十二年度に改修築がなされた。境内は広さ一五〇坪に及び他の神社に比べても決して遜色えしよはない。この広い境内に、三界萬霊塔(明和年間)・天満宮(享和元年)・蛇得大龍神(昭和六年)等が並び立って、寄せ宮された跡が歴然としている。その付近には槐えんの木やたぶの老木数本が空高くそびえており、往時の「島の中」の状況を偲しのぶことができる。更に明治三十六年六月に中老や若者等が寄進した社前の豪華な狛犬や、昭和十五年に女子青年団員の寄贈による幟しほの旗竿等を見るにつけて、先人の後を引き継いだ若い後継者達の愛郷の心情がうかがわれて嬉しい限りである。

この上町の住民は昔より教育にも関心が深く、妙福寺及び近くに久納塾があったが、左記の実久(上町)分教場の所在地としても忘れてはならない。

### 実久(上町)分教場

本校の興文小学校が遠距離だったために、実久(上町)分教場が、明治二十二年設置された。通称を「実久分校」といい、その位置は現在の上町妙福寺の西南部で社頭広次宅のすぐ南側にあった。分校の面積は約五畝歩で教室

は一棟の平屋建のかわらぶきで二教室と廊下である。教室の西側に続いて質素な職員室兼小使室の付属建物があった。この分教場の門札は、当時船津の医師故久納周甫が「実久分教場」と筆太に浄書したという伝承がある。

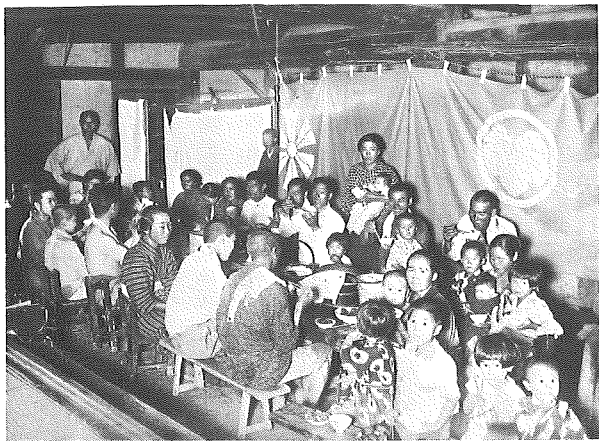
この分教場に学ぶ者は、本校への通学に遠い村内の立野・鍛冶屋・実久・船津・上町それに下古賀の一部の児童に限られた。しかも小学校一年生だけの男女約三十名に過ぎず、二年生に進級すると本校へ登校するという制度であった。

表玄関は、北側にあつて校舎の南側にはポプラの高い樹木が十数本も並び植えられて風致と共に暑い日の日陰や暴風の風よけともなった。運動場という名のつくものは教室の東側に僅かで、現在の若宮社の細長い参道や神前の広場がこの分教場児童たちの唯一の遊び場であり運動場でもあった。

この分教場で教育に携わる教師は毎年一名で多くは女教師が担任した。しかし、地域的に自宅の通勤上男教員もこの分校の担任になる事もあった。

当時の担任教師として左記の先生方が想起される。

町  
馬場 つし(立野) 村岡新四郎(実久)  
鶴 つい(上古賀) 川副 こま(下飯盛)  
上  
野田 しな(下飯盛) 丸山秀一郎(船津)



戦時中の共同炊事

石丸 つる(立野) 碓 フミエ(大野)

この分教場も時代の流れに沿って、昭和四年度よりは廃校となった。したがって、明治二十二年に開設以来、この年まで満四十年の歴史があり、ここで勉強した児童数も千名を超えている。この分校最後の担任教師は既に故人の村山ユキ先生で、最後の児童には下古賀の蒲原国雄・鍛冶屋の徳久タヨ子等がいる。

この村の公民館は若宮さんの社殿に続いて、床の間あり広縁付きの明るい建物である。これは本村出身故木下文次(陸軍中将)の隠居部屋(佐賀市愛敬島)を譲り受けたものである。この公民館と社殿を活用して、村の諸行事や婦人会・青年団の活動がなされたのである。特に婦人会は東与賀村でも戦前・戦中・戦後を通じて屈指の模範支部であった。故山口コト会長を中心に会員一同は相協力して、共同裁園作業・托鉢・遺家族慰問の外、農繁期における共同炊事や託児所に懸命の努力を続けた。しかも山口会長は幼児や農村民のために自宅を開放して、庭中や小屋を提供し炊事や保全と集会や遊戯の場としたという―その遺蹟は今も残されている。これらの婦人会活動の記録は、日誌として珍しくも数冊も現存しており、別記「東与賀村婦人会の結成」の項に当上町支部を代表に記載している。

また上町は酪農の村としても東与賀町における先進地である。当時この村の故御厨兼吾を中心に実久・立野・今町等の酪農家が合計四〇頭から五〇頭近くの乳牛を飼育していた。これ等が共同して、御厨兼吾の自宅前の空地を借用し工事費四〇万円を投じ本村では初めての「共同集乳所」を建設している。

## 六 下 古 賀

下古賀は上古賀の直ぐ南部に位置し、東は上町に西は田中に相接近している。昔から下古賀と上古賀および田中とは関係が深く、この三村に姻戚関係も多いことから、村の成立も相前後してではなか。上古賀八幡神社の境内にある大神宮碑の側面に、蒲原治兵衛・徳久善蔵・徳久源之允等下古賀在任の姓名が刻まれている。その事情が推測される。その事は郷村帳にも「田中村の上古賀からの移住によってできた干拓村と見られる」と述べてある。

この下古賀は、明治十年頃より昭和八年に至る約六十年間にわたり、わが東与賀村創世時代の役場所在地である。往時はわが村の政治・産業・文化発展の中心地として、中枢機関たる村役場所在地として、活動し貢献した村落である。その役場は現在居住している石丸辰一の家屋であるが既に改造されており、今に残るのは当時の石の門柱および石垣等で当時の遺跡としては、由緒もあり永久に残すに価値あるものと思われる。その門柱に長年月の間掲げられた因縁深い木製の村役場標札が残っているが、往時を偲ぶに充分である。

この由緒ある土地であるために小邑に過ぎないが昔からこの下古賀に人物が輩出している。故江口元太郎は、理学博士で海軍大学の教授をつとめ特に潜水艦や電気器具の発明に貢献した。その従弟の故江口倉市は海軍大佐・故森川仁四郎は東与賀村第八代村長を務め、故福田与一は元助役、収入役を永年にわたり勤務、故徳久萬太